Plug and Play Japan　インシュアテックイベント開催

欧州の最新トレンド紹介

スタートアップ企業を対象としたベンチャーキャピタル・アクセラレーターのPlug and Play Japanは7月26日、同社東京オフィスがある渋谷センタープレイス（東京都渋谷区）でインシュアテックをテーマにしたイベント「ヨーロッパInsurtechトレンドの最前線を学ぶ」を開催した。6月末に行われた世界最大級のインシュアテックイベント「ITC DIA Europe」を振り返りながら、欧州の最新トレンドを紹介するとともに、ベンチャーキャピタルやインシュアテック企業の実務家を招いて日本市場でのインシュアテックの発展などをテーマにパネルディスカッションを行った。当日は業界関係者が多数参加した。

イベント前半は、同社でFintech／Insurtechを統括するリー・チャン（李暢）氏が欧州のインシュアテックトレンドについて解説した。

リー氏はまず、グローバルでのインシュアテックの現状を説明してから、自身が参加した「ITC DIA Europe」について紹介した。6月末にスペインで開催された同イベントは、世界中から2000人以上が集まる世界最大級のインシュアテックイベントで、3日間に数十本のセッションが組まれた。同社のドイツ・ミュンヘン拠点もインシュアテックアクセラレータープログラムのデモ・デーイベントを「ITC DIA Europe」のサイドイベントとして開催し、15社のスタートアップによるピッチを実施したと報告した。

また、オープニングのセッションで語られた「インシュアテックの四つの波」についても説明した。既存の保険会社のディスラプターとして2017年ごろからその名が知られるようになった「インシュアテック」は、やがて保険会社との協業でイノベーティブな商品・サービスの提供を支援する企業（エネーブラー）として登場し、その後、米国ヘルスケアのコストの軽減や低所得者向けマイクロ保険の提供など社会的課題を解決するといった役割を経て、現在では保険会社の各業務を効率化して保険バリューチェーンにおける各領域のデジタル化に貢献するソリューションが再び注目を集めている。インシュアテックの今後については、これら四つの波が入れ替わり更新しながら進展していくといった予測を紹介した。

次に、同社でまとめた欧州のインシュアテックのトレンドについて説明した。2022年は、インシュアテックを含めベンチャー関連投資が全体的に落ち込んだ年だったされる傾向にあることなどを紹介した。

また、グローバル経済が依然として厳しい状況にある23年では、引き続き中小インシュアテックの買収が増えていくこと、気候変動や持続可能性といった課題・リスクをカバーする保険の需要が高まること、Web3・0と保険の関連に注目が集まっていくことなどを今後の動向として挙げた。

リー氏はこのほか、「ITC DIA Europe」の各セッションや関係者との情報交換などを通じて注目したいくつかのトピックについて触れ、とりわけイベント参加者の間ではエンベデッドインシュアランスや生成AIなどに注目を集まっていると述べた。また、スペイン滞在中の出来事なども披露した。

日本市場の発展テーマにディスカッションも

続いて、「欧州インシュアテックの日本進出」と題したパネルディスカッションが行われた。欧州スタートアップ企業への投資を手掛けるSBIインベストメントの仁位朋之取締役執行役員と、フランスインシュアテック企業の日本法人シフトテクノロジージャパンで事業統括を務める小出周作ビジネス・ディベロップメント・ディレクターの二人がそれぞれの経験を基に、インシュアテックをめぐる欧州と日本の違いや、今後の日本市場でインシュアテックが発展していくためのポイントなどについて論じた。

欧州のスタートアップをめぐる動向で日本市場にとって参考になることを尋ねられた仁位氏は、英国・ロンドンの事例を紹介し、「古くから欧州の金融中心地であり、シティという地域があるロンドンでは、フィンテック・インシュアテックにおいても世界最先端になろうとの意識を持つ民間企業が多いのに加え、政府も世界で最も起業がしやすい、事業を発展させやすい地域になるんだという気概をもって後押ししているのを感じる」と述べた。

日本市場の魅力や、進出に当たってうまくいった点などについて質問を受けた小出氏は、「海外インシュアテックの立場からすると、日本の保険マーケットは非常に効率的で、世界3、4位のビジネスサイズでありながらプレイヤーが非常に少なく、かつ、東京にオフィスがあればほとんどの保険会社にアクセスできる、という環境はおそらく他国のマーケットでは考えられず、海外インシュアテックが日本市場をターゲットにするのは自然なことだと思っている」と回答。一方で、外資系企業にとっては言語、時差、独特な商慣習などのハードルが非常に高いことから、「日本に進出するのであれば、しっかりと日本にオフィスを置き、ローカルの人材を採用し、それなりの機能を整える必要があるのではないか」と述べた。

また、世界に1000社以上あるとされるインシュアテックのうち企業価値が10億米ドル以上のいわゆるユニコーン企業は40社あり、その中に日本企業が1社もないという現状から、日本でインシュアテックが発展するのに必要なことは、と問われると、「日本市場で生まれるスタートアップはそもそも日本でのビジネスを前提にしており、初めからグローバル市場を視野に入れて活動している海外のスタートアップと同列には語れない。一方で、日本市場でのエコシステムを考えると、API連携やクラウド、個人情報などでインシュアテック企業がより活躍できる環境を整えてほしいと思う」と述べた。

この後、ゲストとして招かれた金融庁総合政策局フィンテック参事官室イノベーション推進室の伴ちひろ係長があいさつし、金融分野におけるイノベーション推進に向けた同庁の取り組みとして、FIN／SUMやFinTechサポートデスクについて説明した他、スペイン大使館経済商務部の投資・産業協力担当官を務める金子健太郎氏がスペインの保険産業や日西ビジネス交流の事例について紹介した。

イベント終了後には、ネットワーキングが行われ、参加者はスペインのワインメーカーであるFreixenet社より提供されたスパークリングワインや食事を楽しみながら歓談した。

㊤欧州のインシュアテックのトレンドを解説したリー氏
㊨欧州と日本の違いについて議論が交わされた